



伊藤は電気通信省に第一期として入り、当時「花形」とされていた電信オペレーターを志願し、一年ほど訓練を受けている。伊藤はこのモールス通信が、技術革新の嵐の中で、先ずは印刷電信に、そしてデータ通信に発展し、今日に至る経緯に、現場で立ち会っていた。百年余にわたるモールス通信の歴史に幕が閉じられるのを前に、感無量の思いがその時込み上げてきたのかもしれない。今では稀にしか利用されることのない、ましてや、理解できる人も限られているモールス符号をあえて使うところに、その気持ちが如実に現れている<sup>1</sup>。

現代社会で不可欠な存在であるインターネットには、文字・記号をデジタル情報に変換・再変換するという仕組みがあるが、こうしたコード・エンコード化の作業は、人間にプログラミングされたコンピューターに一任されている。文字・記号を機械が読み取れるコードへと、コンピューター・プログラマーが翻訳しているのである。この一連の作業は、19世紀半ばから20世紀後半まで世界各地で使用されたモールス通信によく似ている。これは一方が電波を利用してメッセージをモールス記号に変換して送信し、他方がこれを受信して、元の文章に復元するという通信形態である<sup>2</sup>。音声やイメージを瞬時に伝達する携帯電話が広く普及している現在、情報通信技術の祖である電信の存在は忘れられつつある。

## (2) 電信技手という職業

本稿ではモールス電信機というそもそもは外来の技術であったものが、明治以降の日本、特に電報を送受信する現場で、どのように受容されていたのかについて考察してみたい。

通信の現場に目を向ける際に、モールス電信機を操作していた「電信技手」という存在<sup>3</sup>を素通りすることはできない。職業によってカテゴライズされた人間にアプローチする常套手段として、入職経緯（社会階層・性別・学歴）、仕事の内容、労働条件、あるいは、労働条件を改善するための労働組合活動などを検討することが考えられる。ただし、いずれの項目がより重要であるかは、各職種の特性によって異なるだろう。

時代によってその重点は若干異なるが、日本の電信技手に関して特徴的なのは、技術的な「熟練」ないし「技能」の重要性である。電信技手は電信機の仕組みに知悉するだけでなく、モールス符号を正確かつ迅速に送受信するという「特殊技能」を要した。加えて外国の局との通信であれば英語力も問われた。ただし一概に「技能」といっても、その中身は扱う電信機の種類とその操作方法や配置された局の所在地で扱う仕事の量によっても大きく異なる。しかも、ある種類の電信機が存在しなくなれば、その「技能」自体が不要となった。ファックスに似た機能を持つ印刷電信機や双方向型通信機である電話の導入という技術革新により、モールス電信機を扱う電信技手の「技能」の重要性も次第に低下したことが知られている<sup>4</sup>。

さらに電信技手の属性として若年男性が多くを占めていたことも特筆すべきであろう。実は電信の自動化が進むと女性比率が増えるのだが、電話と比較した場合のその比率の低さが目を引く。現時点では最新の2005年度の国勢調査を見ても、電話交換手（有線・無線電話の呼出し・交換・取次ぎの仕事に従事する者）に占める女性の比率が約98%である一方、通信技術従事者（有線・無線通信設備を操作する仕事に従事する者）では約6%、郵便・電報外務員（郵便物の集配及び電報の配達の仕事に従事する）では約12%、その他の通信従事者（航空管制官、

航空管制通信官、電波監視官放送雑音防止技術員、映像調整員など）では約 28%である。通信従事者全体で女性比率が約 21%であることを考えると、電話交換手に占める女性比率がいかに高いかということが分かる<sup>5</sup>。つまり、電信は同じ情報通信技術でも、符号が占める重要性のみならず、その担い手という観点からみても電話と対照的であるといえるのである。

### (3) 史料について

筆者はこれまでも通信事業関連の資料、特に校史・社史、従業員を読者層とする機関紙といったいわば「正典」、また、僅かではあるが電信技手の回想録や電信技手に光を当てる小説などの史資料を渉猟し、電信技手の「意味世界」を解読し、その職場文化にアプローチを試みている。その後、そこで提示した仮説を裏付ける、あるいは反証するような新たな史料を探していた途上で、池上良正氏の研究に遭遇した。氏は宗教学者という立場で、明治末から大正期にかけて最初期の職域伝道の一つである電信員伝道に注目され、特に電信事業に従事する人たちへの伝道を目的とした東洋宣教会機関誌『天よりの電報 (Electric Messages)』(明治 35 年～37 年)に掲載された記事、特にユニークな比喻表現を分析し、神との直接的な交流や聖霊体験を重視した初期キリスト教の聖霊派と、近代的技術を操る電信員との間の一見すると不可解な結びつきに、一定の社会的必然性が存在したことを明らかにしている<sup>6</sup>。氏の分析はもとより紹介された資料の内容は非常に興味深く、筆者はこれに大いに示唆を受け、現在も東京聖書学院の図書館に所蔵される『天よりの電報』をはじめ月刊『電使 (Electric Messenger)』(明治 41～大正 4 年)を、あらためて閲覧させて頂くことになった。本稿でもこの二種類の教会機関紙に掲載された記事、特に職場や仕事の様子を伝える比喻表現に注目し、電信技手と電信技術の関係、そこから生まれる職場文化の実態を、電信技手たちの宗教的世界観から逆照射したい。その際、これまで使用した社史や機関誌、元電信技手の回想録も適宜取り上げたい。

## 1. 電信員伝道について

### (1) 「初期ホーリネス」と電信技手

池上氏によれば、<sup>きよめ</sup>聖潔や神癒を強く唱え、民衆の信徒が多かった「初期ホーリネス」は、中流階級の学生や知識人の教養宗教の色彩が強かった近代日本のキリスト教徒と対照的な存在である<sup>7</sup>。この初期ホーリネスの中心となった東洋宣教会は、中田重治の他、アメリカ人のチャールズ・カウマンとアーネスト・キルボルンが支援して創設された。実はこの二人のアメリカ人、来日前は電信技手であり、本国でも電信技手の伝道を行なって、伝道団体を組織化するに至っていた。その一例が『天よりの電報』に次のように紹介されている。

「線の他端のポストンの技手とは、顔を合した事は有りませんでした。非常に懇意になりまして、毎夜通信を重ねました結果、一千哩の隔りがあったにもかかわらず、双方共能く知り合ふ事が出来ました。私共の仕事は株券に関係した相場の数字を通信するのであって、まことに面白くない仕事では有

りましたが、併しボストンの相手が善人であって私は彼を愛して居、又快活なる彼の通信が何時も判然して居った為に、私共は二人して気楽に又愉快に事務を執て居りました。真に打ち解けた間柄でありました」<sup>8</sup>

仕事であっても、暇な時間を見計らって相手の電信技手と意思疎通をすることができたことが分かる。そこにシカゴとボストンという遠い距離を越えた友情関係が芽生えるが、その数ヶ月後、相手の電信技手が病気や遊びを理由に欠勤するようになり、「僕は君の打電の具合で、直と酒を飲んで来たなど覚ったよ」と、酒が原因で欠勤するようになったのではないかと疑う。そこで、自分がやはり以前酒に溺れ、キリスト教に入信して改善した経験があり、相手にも「僕は主耶穌基督によりて癒された」と伝えている。

日本でもこのアメリカにおける例のように、顔も合わせたことのない、遠い場所にいる仕事仲間と意気投合し、そこから伝道に至るケースもあったが、次に紹介する例のように、クリスチャンとして禁欲的な生活を送っているがゆえに、「汚らはしい肉」の話題で盛り上がる「不信者」の同僚となじまず、遠くに友を求めるためのツールとしても電信が使用されるケースもあった。

「予は通信の事業に従事しその末端を汚したものであるから辞職後わずかに未だ半年しか経過して居らぬけれども思ひ出す度毎に恋しくなつて来てモ一一度手を触れて見たい気がする。…／予が務めて居った局は田舎の三等局で勿論周囲は悉く不信者であった。従つて思ふ如に心も通ぜず話も合わずである。クリスチャンたるの故を以て余を擯斥せんとする傾向は疾くより彼等の為めに祈つて居つたのであった。…しかし、幸にも余は久しからずして一人の文友を興へられた為めに相互の通信に由つて大に相慰め相励まし益を得たこと実に一通りでない。「好き音信の骨をうるほす」経験は今だに忘れんとして忘れかねるものがある。／不信者が集まると其座は何時も汚らはしい肉につける談話でもって持ちきり、肉欲にあほられては種々感心のできない事を編み出すが常である。余はかかる謀事に会つたことが実に幾度あることか解らぬ。人情としてはその座を立つに忍びぬ又仲間入りせずには居られなかつた」<sup>9</sup>

「不信者」が集まる職場で持ちきりの「汚らはしい肉につける談話」に抵抗を感じつつも、同僚としての「人情」で「その座を立つに忍びぬ又仲間入りせずには居られなかつた」辛い思いがここに吐露されている。自分を偽らねば生きてはいけない職場ではあるが、電線を通して通信する「文友」との交流によって、「大に相慰め相励まし益を得た」という。

また、クリスチャンではないが、年齢を一歳ごまかし、14歳で札幌郵便局通信伝習生養成所に入った高田富与の例を見てみよう。高田は札幌郵便局通信伝習生養成所に入所した明治39年10月末に5ヶ月ほどで早くも卒業し、札幌郵便局で2ヶ月ばかり実務の実習をし、翌年正月に岩見沢郵便局へ赴任した。父の仕事が上手いかなかったため中学校への進学を断念した高田は、「早く母を楽しませよう」と電信の勉強に打ち込んだという。まだ少年だった高田は、雪の夜などの当直では、寂しい思いをしていたというが、いつしか各郵便局にいる「電信係」同士が、モールス信号を交わして日頃の鬱憤を晴らすという、密かな楽しみも生れていた。例えばある日の夜、遠く北に位置する利尻島の郵便局から、「オレは毎日荒涼とした北の海原をニ

ランでキーをたたいている。いつまでもこんな離れ島にいたくはない……。しかし、結局はオレもこの土になるのかも知れない」という訴えが届いた。電信技手は機会を窺っては、モールス信号を用いて、個人的な想いを交わしていたのだ。高田は当時を振り返り、「電信線を伝って、海を渡り野山を越えてくる見知らぬ電信係の訴え、ワシもそれに答えて、真夜中の当直室で、大いにキーをたたいたもんです。お互いに文学青年らしい表現を使ってね。なんとなく神秘的なかんじがしたもんですよ」<sup>10</sup>と記している。業務上の用途以外の私用はもちろん禁じられていたが、監督の目を掻い潜ったネットワークが築かれていた。労務管理が未発達で、監督があまり厳しくないために、仕事を自分の裁量でこなせる地方の郵便・電信局の方が、それは一層容易だったのだろう。

このように電信を用いて遠くにいる同僚と信頼関係を築き、そこから伝道に発展させた経験をアメリカで積んだ二人ではあったが、それでは言語や文化の違う日本ではどのようにして、電信技手たちに働きかけたのだろうか。ホーリネス教会の初期に、中田重治の側近として活躍し、戦後は日本ホーリネス教団の創設者、指導者ともなった車田秋次（1887～1987）が、著書でキルボルンとの出会いについて触れている箇所があるので、それを参照してみよう。

車田秋次は茨城県東茨城郡の農家の三男として生まれ、キリスト教徒の接点は電信局で働き始めるまではなかったという。明治34年に高等小学校8年の課程を終えたものの、実家は経済的に二人の息子を進学させることが困難で、少なくとも一年間の待機を命じられた。車田はそれに耐えられず、年齢を一歳偽って電気通信員養成所の入学試験を受験した結果合格した。養成所では特に英語の勉強に力を入れていたという。養成所での7か月の勉強が終わると、開校されたばかりの高等科に編入した。ちょうどその頃、キルボルン（1865～1928）が来日し、伝道をする前に日本語を習得する目的で車田が住む宇都宮に居住し、八畳続きの自宅でバイブル・クラスを開いていた。その知らせが、高等科の元牧師の英語講師から車田にも伝わり、ネイティブとの会話で英語の上達を目指すという理由から参加することになった。当初三十名ほどの参加者があったという。キルボルンは神学校出身の宣教師ではなく、シカゴ電信局に勤めていた電信技手であったが、その「言外に現れる信仰的熱心、敬虔的ムード」に、17歳の車田の求道心は強く刺激され、入信に導かれることになった。そしてちょうどその頃、東洋宣教会総理のチャールズ・カウマン、聖書学院長の中田重治の宇都宮訪問伝道が続いた。チャールズ・カウマンもシカゴ電信局で主事を務めていた人物で、電信のキーを叩いて、遠方の電信技手にも伝道をしていた。これが後に電信技手宣教師団に結実し、やがてホーリネス教会の前身である東洋宣教会の基礎ともなった。二人の同業者の伝道は、「少なからず私の信仰生涯に対しても、魅力的であり、又インスピレーションであったこと等は、私の忘れえないことである」と車田は振り返る。また夫と来日したカウマン夫人も車田に献身し、聖書学院入学の強い動機を与えてくれたという<sup>11</sup>。

その後の車田の電信員伝道について触れておこう。車田は、宇都宮、仙台、青森、秋田にあった逓信局の一等局で「精神講和」を始めた。伝道の対象者は電信課に勤務する人々、養成所の教師と生徒であった。この講話は、学科の勉強が終わった夜に、養成所付属の寄宿舎集会所などで行われた。興味深いことに、逓信局の局長はこの活動にはとりたてて立ち入らず、養成

所の所長が許可をし、車田らは自由に集会所に出入りすることができたという。さらに、『天よりの電報』と提携して『電使』を編集・刊行しつつ、逓信部内・鉄道部内の求道者、信者の指導育成に努めたのであった<sup>12</sup>。

## (2) 電信の比喻による教え

ところで、人類の歴史と歩みをともしするキリスト教信仰と近代的な通信技術を扱う電信技手とは、一見すると相反するようにも思われるのだが、電信技手の職域伝道が成功した理由はどこにあったのだろうか。その鍵は意外にも神と電信技術の類似性にあった。例えば次の文章を読むと、見えない電気と見えない神が似た存在として捉えられていたことが分かる。

『電気を見せろ』といくら注文した所が『オイこれだ』と見せる事が出来ぬものだからである、然し目に見えないからって電気は無いもんだとは申されますまい。併しながら唯一の電気を知るの方があります即ち之にさわって感ずるとでもありますまあ一度電線にさわって御らんない必ず其存在がわかります。／それと同様に神は見えざる御方であり、けれども必ず存在し給ふのであります。而して諸君が電気存在をさわって知ることが出来る様に神は信仰に依て知ることが出来るのであります<sup>13</sup>

電気は見えないものであるが、その存在を知るためには、「之にさわって感ずるとでもありますまあ一度電線にさわって御らんない」といい、神も電気と同様に見えないが、電気に触ってみてその力に驚愕するように、「神は信仰に依て知ることが出来る」という。

また、次の文章のように、電信業務と神への信仰の類似性についても触れられている。

「素人が電信局へ来て発信器の前に立ちました処で、目的の通信を自分で発送する訳には参りません、若しも線を結び付ける方法を知らずして徒に轉換線を左右へ動かしなど致すならば飛んでも無い面腹を起すに相違ありません、救ひの道を弁へずして徒らに苦悶する求道者も矢張り其通りで有ります<sup>14</sup>

ここでは、通信のことを知らない素人が電信機の前に立っても何もできないことを、「線を結び付ける方法」すなわち「救ひの道」を「弁へずして徒らに苦悶する求道者」に喩えている。こうした現場の経験に立脚した比喻に満ちた文章は、他の記事に時折現れる聖書の事例を用いた教えよりも、一層具体的で理解が容易な印象を与える。次の文章もまた同様である。

「君ちょっと前にあるハンドルを叩いて御覧如何御考へなさるか知りませぬけれども若し其線路と器械とに異常が有らせぬでしたなら勿論トンカツーかが該回線中の各機会に印出した事で御座りませう併し不知人に尋ねて御覧なさい八里も九里もある所の器械に字が印出したなんてそんな馬鹿なことがあるものかと強情張って反対致しませうと私は念ひますよー神人間の不可見天回線ですこの線のハンドルを今迄握って居てそれとは知らずに君は恐ろしい事を然し事実を在天の現字紙に劃出したのです…其現字紙は即ち君の過去の生涯の記録なのです…神の御前にひろげられ讀上げられて恥ずかしからぬ事のみであり得たでせうか豈計らんや<sup>15</sup>

モールス符号を用いた通信では、トンとツーという短点（・）と長点（—）の組み合わせで文章を作成するが、符号を押すと、それが遠い場所の印字機から現字紙に打ち出され、それを相手の電信技手が解読する。車田はこの原理を用いて、人間と神の関係について分かり易く説明している。すなわち、人間の一つ一つの行動が見えないモールス符号のように、知らないうちに神の前にある現字紙に打ち出され、「過去の生涯の記録」として残っているというのである。人間は知らぬうちに、意識もせず多くの罪を犯しているし、それを意図的に隠そうともするが、小細工をしようと神が全てお見通しであるという意味である。

ところで、先の車田は後続の月刊誌『電使』でも編集を担当している。この冊子には車田はもちろんのこと、電気通信員養成所に通い、電信技手として働くクリスチャンが投稿しているが、車田が「自分自身の体験と結びつけて信仰の必要を、通信事務、勤務心得等との上から話しだして行きました」<sup>16</sup>というように、日々仕事で使う電信、電気、電線などの比喩を用いて、さらに職場での経験を持ちだしながら、信仰への渴望・必要を訴える内容の記事が多い。読者のほとんどが電信技手であるため、共通言語が電信にまつわる事柄であったことは不思議ではないが、加えて、目に見えない電気の作用と神の類似性、神からの見えないメッセージを受信する電信技手というイメージも大きな役割を果たしていた。

そもそも『天よりの電報』という機関紙のタイトルにもあるように、電信技手は神からの電報、すなわちメッセージを受信し、その他の人々に伝える尊い使命があるとも認識されていた。『天よりの電報』（第1号）の冒頭には、次のような文章が記されている。

「神は救の音信使を用ひ給ふ器械として人間を用ひ給ひます…我等は天来の電信を受るサウンダーの如くなりて、明らかなる音響を発する者となり度あります、若し我等が神にキーを使用させ奉るならば、神は此人間てふ器械を通して永遠の失望より多の貴き魂を救ふ所の神の愛の電流を發送し給ひませう、ドーカ我等は此身を義の器として神に献げ度あります」<sup>17</sup>

神は人間という「器械」を通して、「貴き魂を救ふ所の神の愛の電流」を発信している。そこで電信技手は「義の器」として自分の身を神に献げ、神の「愛の電流」を受信し、迷える人々にこれを伝えなければならない使命感があるという主張が伝わってくる内容である。このように、電信技手を神の「通信器」に喩える文章は、この他にも多く見受けられる。

「完全なる通信器は幾多の電報あるも迅速に発信し得る者である、然れ共不具合の通信器壹通の電報にすら数十分の長時間を費す者です故に係員は不完全否不具合の器械にて発信したり受信したりする事は最も忌み嫌ふものであります、第一に迅速を旨とする通信の主意に叶はない、それに多大の手数を要すると云ふ事になりますから誰れでも不具合の器械に当たると喜ぶ者はありませんこれで何を学びますか私は信者壹個人の伝道法を学ぶ事を得て喜んで居ります…この婦がキリストより救の電信を受けながら不具合の器械の様に迅速の其の事を為さずして居りましたなら其邑人にイエスキリストを紹介する事が出来ませうかこの婦は完全の器械と同じでしたから受信が迅速に出来上がり直ちに邑人に配達して其の救の電報を渡せし為めに邑人も来りて救はる事になりました（原文ママ）」<sup>18</sup>

「完全なる通信器」とは「幾多の電報あるも迅速に発信し得る者」という。それによって、神の教えを伝えられた人々が救われるからである。神の電報を迅速に送受信するには、断線<sup>19</sup>がないこと、電流が強いこと<sup>20</sup>が必要である。すなわち、「天父と私共の交通関係」に「面倒な理屈や、何故と云ふ障害物を取り除かなければ不可い、浅い浅い人の考へや常識と云ふ體のいい名でむやみに制限削除するはよくない、只單純に信じたい」<sup>21</sup>というのである。

明治 45 年には大型客船タイタニック号が氷山に衝突して沈没するという事件が起きた。多数の死者を出す甚大な被害を出し、歴史に残る大惨事であった。しかし、船に備え付けられていた無線機が故障していなければ、他の船舶から流氷に関する警告を受けられた上、より多くの船に救助を求めることができたはずであった。この事件を境に、無線電信の重要性が再認識され、船舶には無線電信の装備と電信技手の常駐が義務付けられるようになった。このような時代背景の中で書かれた次の文章からは、神と交信し、人の命を救う電信技手という現実的な裏付けをもつイメージが浮かび上がってくる。

「船の中の人の言を聞き又遙か向ふにおる人に話す事の出来る人は度々船長より大切であります、神は無線電信技手を求め給ひます、即ち祈ることの出来る人を求め給ひます、そんな人は多くの人を救ふことが出来ます、どうぞそんな神の無線電信技師とおなりなさい」<sup>22</sup>

船に常駐する無線電信技師は「船の中の人の言を聞き又遙か向ふにおる人に話す事の出来る」ゆえに、船を操縦する船長よりも重要なことがある。また、「祈ることの出来る」ゆえに「人を救ふことが出来る」のが「神の無線電信技師」であり、そうした「神の無線電信技師とおなりなさい」と勧められている。次の文章でも、有事に重要な情報を送受信する、いわば人の命を託された電信技手であるゆえに、信仰があるということがより一層重要とされていたようだ。

「一の信仰もなき者が社会の耳目たる交通事業殊に最も敏捷に正確に立ち働かなければならぬ此の事業に只徒らに考へて従事せられてをる事であります。…欧米各国にては近来交通事情即ち郵便電信、船舶鉄道に従事すべき者は皆基督教信徒でなければならぬといふ事が至る処に要求せられ且つ実行せられて居るを聞きます…願くは我が同業者諸君は無駄話や詰らぬ遊び等に空しく貴き時間を過さずして我等直接に関係を有する此の靈の問題につき深く考へ神を信じ人を愛し活ける信仰を以て斯の事業に従事しましたならば其の結果が、ただに各自の救われるばかりでなく事業に及ぼす大なる効果を見ることが出来ます。／お一我等は單純に神を信じ救を得る事です然すれば電信上にも今日迄多くの時間を費し徒らに争論など致し電報を非常に遅延せしめた事がなくなり其に依り享くる利益は彼我の間に沢山あります。世人も安心して我等に電報を託し又信じて讀む事が出来ます」<sup>23</sup>

欧米では「郵便電信、船舶鉄道に従事すべき者は皆基督教信徒でなければならぬといふ事が至る処に要求せられ且つ実行せられて」いるという例を挙げ、責任重要な「社会の耳目たる交通事業」であるからこそ、その担い手の信仰の有無が問われると主張する。

池上良正氏は、電信技手は「一定の試験を経て、当時としては最先端の技能を身につけた職

員たちには、それなりの専門職への誇りと矜持があったろう」が、「社会的地位も、立身出世の野望に燃える青年たちが憧れるようなエリートコースからは、はるかに外れていた」<sup>24</sup>と記しているが、電信技手の養成機関で授業料が免除され、書籍や筆・墨などの学用品は支給され、工部省官吏になる可能性を与えられることもあって、実家は貧乏ながら身を立てたいと考える優秀な若者の間で人気は高かった<sup>25</sup>。

電信機の操作が複雑化すると、電信技手を養成する必要が生まれてきた。近代化の後発国であった日本では、電信機が元々存在し、使用されていたわけではないので、技能を持つ労働力の蓄積が絶対的に不足していたからである。欧文は字数が少なく、一字号で長短点合計数が4個を越えるものは皆無であったのに対して、日本語は字数が多いため、より一層習得に困難が伴った。日本の技手はモールス符号の暗記にしても、字数の多い日本字の他、欧文文字、記号、数字の全てを暗記する必要があったのである。このために、優れた人材を公に募り、企業内養成する必要があった。官僚といった「正統派」エリートでこそないが、「市井」のエリートという特殊な位置づけにあったことは再度確認しておくべきである。

経済的に恵まれない優等生のため、学びながら生活費などを稼いでいた多くの電信技手の中には、後に様々な理由から、作家、演出家、落語家などに転職したり、あるいは、上級学校に進学したり、出版社の社長、大学学長や市長に出世する者まで現れた<sup>26</sup>。電信技手の仕事とは官費で勉強するための手段の一つであり、次のステップ・アップのための通過点であったともいえる。これは、一つの職場で一生働くという労働慣行が、当時はまだ浸透していなかったことも示しているだろう。要するに、池上氏が分析するように、貧しいが志の高い若者が、技能者として相応の処遇を受けていないと不満をただ募らせていただけではなく、他方で将来のステップ・アップを見据えつつも、社会と神と人の交通にとって重要な通信の担い手であるという、仕事に対する自負や使命感が強かったと考えられないだろうか。

もちろん、使命感というきわめて高次の動機から信仰の道に進む人は多数派ではなく、日々職場で遭遇する問題の解決を求め、信仰に心の拠り所を求めたという場合も多かるう。そこで、先に引用した文章の中には、信仰の効用として、「無駄話や詰らぬ遊び等に空しく貴き時間を過ぎず」「多くの時間を費し徒らに争論など致し電報を非常に遅延せしめた事がなくなり」という二点が挙げられているのが興味深い。次章で詳述するように、実は実際に当時の職場で起きていた問題が電信技手の信仰の所以ともなっていたのである。

## 2. 電信技手の信仰の所以

車田はキリストの教えを学ぶうちに、「自分は几帳面で間違ったことはしたことはしたことはないと思っていたのに、それが、全くの根拠のないもの、罪というものが、いかに人間性のうちに深く根を下ろしているものか」と、人間の罪を意識し、自分の罪も振り返ることになる。例えば「家の近所の商店に対しても、些細ながら、金銭上、不正直のあったこと」「偽って戸籍の性年月日より一カ年早く記入して（筆者注：養成所の入学試験を）パスしておったこと」「トン

ツ一の通信機で喧嘩したこと」等の罪の数々が、車田の脳裏をよぎった<sup>27</sup>。その他の投稿記事も読んでも、入信した電信技手たちに罪として意識されていた事柄に一定の共通性があることが分かる。大別すれば、官吏という立場に内在する問題、酒・煙草・遊興、通信中の喧嘩の三つである。次にそれぞれの内容を確認していくことにしよう。

### (1) 官吏という立場に内在する問題

官吏というのは現代の公務員であり、社会的威信や信用が高い職業であった。したがって、そう簡単に就ける職業でもなく、また、晴れて官吏になったとしても、官吏の中での序列化が存在し、次に挙げる事例のように、心に悩みやストレスなどを抱えがちであったようだ。

「私の電信技手となったのは明治 34 年 4 月の事で初めて前橋局へ在勤を命ぜられました、私は非常なる神経質で一日も安き事なく又自分の名誉自分の富貴のみを追求して居りました、それで時々親や他人の事を思はないではなかったがそれは殆ど自分の利益から割り出した考えでありました、であるのみならず自分の家は貧困であり且つ自分は始終病身でありましたから色々な方法を講じました、而して完全なる人物に成ろうと苦心しました、けれども私の渴きを止めるものは一つもありませんでした、で私はどうしても此宇宙には一大真理が伏在しておるであろうと想像しつつ切りに色々な書物を読みました然るに多くの書物を読めば読む程苦しみが増しました、であるから安心を求めやうと頗る力を尽くしましたが何物も私の渴きを癒したものはありません、それ故に其結果遂に恐るべき肉欲に誘はれました、それよりは数限りもなき罪を犯し恨みあり妬みありて人間とゆうものはかくも苦しみものであると断定するまでに立至りました」<sup>28</sup>

車田と同様にキルボルンのバイブル・クラスに参加し、洗礼を受け、後にホーリネスの指導者となった筆者の山崎亭治は、「非常なる神経質」である上に、「自分の名誉自分の富貴のみを追求」していたという。山崎なりに「完全なる人物に成ろう」と努力したものの、その「渴き」は読書でも癒しがたく、ついに「恐るべき肉欲に誘はれ」「数限りもなき罪を犯し恨みあり妬みあり」となるに至った。樋口為之助も「官吏の常として、人の欠点をさがし、人を誹謗などして、一日として今日のようなたのしい日を、送ったことは有りませんでした」<sup>29</sup>というように、神経をすり減らす職場であったようだ。山崎は「罪」を重ね、それに懊悩する最中にキリスト教に出会い、「自分の罪人なる事を教へられ、私は貴き血より外に何物も頼るべき者のなき事を自覚致しました、其時に私はキリストを受け入れ凡ての罪を赦されました主の御名は永遠に讃むべきであります」と悟ることになる。

「然れども信者となりまして後私は尚罪を犯す性質即ち<sup>〇〇〇</sup>舊き人と云ふ一つの吾が良心に逆ふものがある事を自覚致しました、噫此罪の根は如何なる人でも持ちて居ります、けれども神なるキリストは此罪を潔むる力を持って居ります、私は私の身体も魂も、思ひも神に捧げ此罪の根を聖霊の火もて燬き盡くされん事を信じて祈りました時に私は何とも云えない自由の身となりました、神と私との間を障ぐるものは何物でも捨てる事が出来ました、これは実に驚くべき奇跡と存じます、私に此の事を成し給

ひし主の聖名を讃美いたします」<sup>30</sup>

「渴き」から犯した数々の罪を、キリストは「潔むる力を持って」いることを山崎は知り、「身体も魂も、思ひも神に捧げ此罪の根を聖霊の火もて燬き盡くされん事を信じて祈る」ことで「何とも云えない自由の身」となる。このような、官吏という職業の特性と若さに起因するであろう心の中の葛藤は、次の孤島生が紹介するある青年の事例にも読み取れる。

「県下の或る田舎町に一青年があった。小官衙に奉職して居った。然るに青年には有り勝の事だが、彼は上級官吏の仕打ちが気に食はぬ。自分に対する態度が如何にも面白くない、といふ所から一種の不平熱が起って来、延いて所謂青年時代の煩悶に囚はれた。世を墓無み人を恨み、鬱憤を晴らす間になく悶々やる瀬無く暮して居った。時恰も一人の友人から或る雑誌様のものを送られた。披見すれば何ぞ計らん我が「電使」であった。読みもて行くうちに或る記事に触れて甚く感じた。それから基督教を慕ひ、遂に或人から福音を直接聴聞して救はれ、日々楽しい楽天主義の生涯を送って居る」<sup>31</sup>

青年は「上級官吏の仕打ちが気に食はぬ」「不平熱」と「青年時代の煩悶」に苛まれ、悶々とした生活を送っていたところ、『電使』という雑誌に出会い、キリスト教に目覚め、「福音を直接聴聞して救はれ」「日々楽しい楽天主義」の生活を送るようになったのだという。

## (2) 酒・煙草・遊興

車田は「電信人にキリスト信者は少ない併しみんな墮落して居る恰も磁気を失った耐久磁石の様で最初は磁気を即ち生命を持って居たのであるが捨てておいた故に只之を失ったのみである」<sup>32</sup>と記している。これまで筆者が検討してきた資料では、電信技手に対して同業者が「墮落」と批判するような、ここまであからさまな表現に出くわしたことはなかった。

草創期の電信技手として活躍した松代松之助も、「其頃の繁線担当者といふ者は大層幅を利かせたもので、八木氏などは其の一人で、着物の下から赤い袖などを覗かせて、ゴロリとした風で威張ってゐた。其頃のオペレーターは、最初の頃は蛮骨振りを發揮し、斗酒猶ほ辞せずといふ様な豪傑が多かったが、20年頃からは、鹿鳴館風の影響を受けたものか、蛮風は跡をたつて、寧ろゴロリとした風が流行した」<sup>33</sup>と証言する。最新技術を扱う官吏であった当時の電信技手は、「特殊技能」を保持するエンジニアであり、かつ学者肌な一面も見せていたらしい。しかも電信技手としての能力だけでなく、彼らの生活様式、服装も含めて、文明開化を象徴するハイカラなイメージを持っていたようだ。文豪夏目漱石の兄も電信技手として働いたことがあるが、当時は粹とされていた「紅裏の着流して働いていた」と伝えられている。また、こうした服装一つにも見られるように、「蛮骨振りを發揮し、斗酒猶ほ辞せずといふ様な豪傑が多かった」という表現はあながち誇張ではなく、未婚の若年男性が多く、また後にも触れるように業務上のストレスの強い電信技手の間では、飲酒や喫煙、遊興も盛んだったという<sup>34</sup>。これを車田からクリスチャンは「墮落」と捉えていたのである。

例えば郵便電信学校を卒業し、将来を嘱望された電信技手でもあった樋口為之助は、働き始

めた当時、明治時代の電信技手の間で主流であったという生活スタイルを、「今から思えば実に身の毛もよだつ程あぶない道を通って来た」と、次のように振り返っている。

「私は 10 年前に郵便電信学校を卒業して、皆さんと同様な官職を務めて居った者でありました、今は如何だか知りませんが其頃の技手といふ者は品行の修まった者は、誠に少ないのでありまして、酒色に耽るの、電信技手間の特有の性質としてとがめない様な有様でありました、私も其様なあぶない社会に、とびこんだものですから、いつ知らずともなく、酒を飲み、煙草を喫し、寄や劇場の様な悪しき所に入りました。…私は同輩の中で三人と数へらるる程の喫煙家でありました、私が神の子であると信じた、時に此の如き不潔物を嗜んで身体を害して居ることは、大に神の心を痛めることと感じて断然これを廃そうとした、時に友人のうちには口にはいはいないけれども、大変反対して喫煙を平素せぬ者までもシカレットを燻らして、無理に喫煙の嗜好心を再燃させる様にされましたが、神に祈って力を得、是等のものと戦ひまして…私は幼少の時から家庭の教育によって、飲酒を禁じて居りましたが、知らず知らず友に誘はれ父母の教へにも背いて、禁を破る様になりました…幸にも早く教を聞いた為、重大の罪惡を犯す程には、墮落しませんでした、今から思えば実に身の毛もよだつ程あぶない道を通って来たことでありました」<sup>35</sup>

当時は「品行の修まった者は、誠に少ない」状況で、「酒色に耽るの、電信技手間の特有の性質としてとがめない様な有様」であったと証言する。そして、家庭で飲酒を禁じる教育を受けてきた樋口は違和感を抱きつつも、同僚の影響もあって、こうした職場の空気に溶け込み、「いつ知らずともなく、酒を飲み、煙草を喫し、寄や劇場の様な悪しき所に入ります」するようになり、ついには禁煙も困難なヘビー・スモーカーになった。しかし、「幸にも早く教を聞いた為」に、これ以上の罪を犯し、「墮落」はしなかったという。

飲酒をめぐる悩みは多く、次の事例は既婚者が飲酒で家族を巻き込む深刻な事態に至り、最終的には妻と宣教師の導きで改心したというものである。

「オイオイ仲（僕の妻）は居らんか酒を持って来んか酒でなければ夜が明けぬわいオイコラ早くせんかッ。時維明治 37 年 4 月 30 日早天寢床に於ける僕の叫びであった。僕は元來酒を好むこと恰も蟻の蜜つにおけるが如くよきにも酒うきにも酒、酒なくて何の己が櫻かなといふイヤハヤ厄介極まる男でした。思へば今更我ながらあきれて物を申されませぬ。しかも教職に在りながら。…我一人の故を以ていとしい妻子にまでおなじ悲にまきこめることの罪深さよ。過ぎし半生 30 年むなしく酒に生命を左右せられ是がために犯せる罪そもいくばく罪は又罪をうみうみて家庭(ホーム)の平和もこれがために破られ家政の秩序も是がために乱され財政の困難も是が為に生じ名誉も信用も是がために損し実に僕が罪惡の多くは酒のためなりけり。…今日しも妻は近頃僕の精神状態に異状を呈するまで煩悶し苦慮し果ては暴飲と出かけるので深くも彼の小さき心をいため遂に当福音伝道館にはたらかる伝道師は愛の炎もてこの魔窟の暗を照らさんとここに訪問せらるることとなったのである」<sup>36</sup>

官吏でありながら、朝から「酒を持って来んか酒でなければ夜が明けぬわいオイコラ早くせん

かッ」と叫ぶ、暴飲癖のあった新關光蔵だが、このために「家庭(ホーム)の平和」が崩壊し、「家政の秩序」が乱され、「財政の困難」も生じ、「名誉も信用」も失墜し、最終的には精神状態に異常をきたすに至り、妻と宣教師の導きによって信仰の道に入って行った。雨森氏正が「不義姦淫は勿論でありますが煙草も酒もエボナイト不導体と成り易きもの」<sup>37</sup>というように、酒は他の罪と同様、神と人の通信を遮断する妨げとして捉えられてもいた。

池上氏によると、飲酒・喫煙、娯楽や嗜好を「不潔」として激しく拒絶する傾向は初期ホーリネス、プロテスタンティズム全般の禁欲的倫理観に特徴的であるのと同時に、「勤勉」「儉約」など従来の通俗道徳や修養思想にキリスト教から新たな活力を吹き込まれたという<sup>38</sup>。飲酒・喫煙、娯楽や嗜好が過ぎて身を持ち崩すことは、時代や洋の東西を問わず見られる普遍的な問題であり、「禁欲」こそが有効な処方箋として捉えられていたのである。

### (3) 通信中の喧嘩

先に触れたように、車田自身も神に対する罪として強く意識していたのが通信中の喧嘩、すなわち「機上論争」と呼ばれる職場慣行であった。車田は後年、「入信の頃、電信局に勤めていて、トンツ一の通信機で喧嘩したことが罪だと心にせめられたということをお聞きしたことがありますか」という質問者からの問いに答えて、次のように簡潔に説明している。

「主に通信上の技術の上下によるので、下手な人は、仲々、通信が開きとれず、今のは何ですか、何ですか、というように繰り返して聞き返されるので、何だ下手くそといじめられたものです。すると、向うも、もっとはっきり打てこの下手くそ、というように、電信係には、よくあるもので、口喧嘩みたいな具合に、電信でやるわけなのです。しかし、私が信仰に入ってから、クリスチャンには、そういうことがあってはならぬと、自分には一つの悩みの種となったわけで、全き救いの経験、全き潔めの経験というものが、身につけられたら、それらのものはきつとなくなるに違いないということで、しばしば、そのことで苦しみ、祈って解決される迄に、相当の年月のかかったことを覚えています。それは、誰誰にお詫びせねばならぬということではなく、自分の心に起るそういう興奮との戦いというものが、信仰と結びついて、解決が求められたわけなのです」<sup>39</sup>

「機上論争」とは電信技手同士がお互いの技量を競う、あるいは、業務に不慣れな新米をシゴク意味のあった職場慣行で、不正確であったり遅い通信をすると、「もっとはっきり打てこの下手くそ」と罵倒されたり、「へボ」と言われ通信を拒絶された。既に筆者は、この「機上論争」については、「技能」を磨く、単調な仕事に彩りを添えるプラスの機能を持ちながら、そこには同時に、電信業務をジェンダー化するというマイナスの側面も存在したこと、「手くずれ」とも呼ばれ、今日的な意味での職業病の引き金にもなったことについて別稿で論じたことがある<sup>40</sup>。「手くずれ」とは腱鞘炎に類似した症状を持つ、習い始めて2~3年後に訪れる「スランプ」のことである。「手くずれ」を患うと、どうしても特定の文字のみが打てなくなるため、電信技手にとっては致命的な問題だった。「現場では練習もままならず症状が悪化してしまい、重症に

なれば送信用紙を見ただけで手がこわばってしまう」こともあったが、約9割の人がこれを克服したという<sup>41</sup>。「手くずれ」の防止に関して、経営側からは左右の手でモールス電信機を扱う、見習い中の不適者を排除する、自動電信機の使用などが推奨されていた<sup>42</sup>。電報量の増大に伴い、作業の迅速さや正確さが、監査や電信競技会の開催を通して一層求められるようになり、技能の高い「英雄」が持て囃された。東京中央電報局次長を務めた山我義二郎が、「トンツ一のうまい人は同僚や先輩からも珍重がられるし、部屋を歩くにしても肩で風を切って英雄然たるものだった」と振返るように、モールス電信機を扱う「技能」の高い電信技手は英雄として扱われた<sup>43</sup>。その一方で、車田のようにそこから「降りる」人や、「技能」中心主義の偏りに問題意識を持つ人も生れた。

神業的な「技能」の持ち主たちや通信事業に長く従事した者たちの回想録で、「機上論争」は若き日の苦しく厳しい経験には違いないが、自分自身でこれを克服し、次の段階にステップ・アップした良き思い出として記憶されていることがしばしばである。他方、「クリスチャンには、そういうことがあってはならぬと、自分には一つの悩みの種となった」、という車田の叙述からは、「正典」からはかき消された「機上論争」をめぐる負の記憶が立ち上る。

「就職した始めは未熟でしたから何の線に掛かってもへボばかりやられました又怒られて時々酷い目に逢ひました、それから上手になるとよく喧嘩をやりましたから大層心配して遂に脳溢血に迄なりました、この人情も何もない実に冷たく真暗な望みのない月日を一年半も迷って居たのですが昨年4月キルボルン兄が宇都宮に参られたので始めて光を見出すことが出来ました其光は即ちキリストです…局を辞して全く今は真の神様の為にのみ働いて居るのです。／私は実に電信員の中に恐るべき罪惡の行はれて居るのを悲しむものです、喧嘩や争論をしたのは私のみでなくしたことはない人は果してありませうか、あなたは毎日これを目撃しました屢々なさるでせう、天の真の神様は一々漏らすことなくご存知です、あなたはなすったことがあるから罪人です、よし喧嘩口論はせなくとももし一度でも欺くと煙草や酒を飲むこと人を誹り恨むことの如き良心の凡て悪となすことをいったことがありまた善と知て之を行はなかつたことがあるなら立派な罪人です、その犯罪の結果あなたはどうしても地獄の刑罰を免かるること出来ませぬ」<sup>44</sup>

車田も最初はいじめられていたが、上達すると「よく喧嘩をやりましたから大層心配して遂に脳溢血に迄なりました」という。車田が「恐るべき罪惡」と呼ぶ「機上論争」が、これほど神経と身体を酷使するものであったという記憶は、筆者が検討してきた「正典」の中には見出すことができない。車田は「この人情も何もない実に冷たく真暗な望みのない月日を一年半も迷って居た」らしい。「人情も何もない」電信業務に従事する中で、キルボルンが宇都宮に来て、「始めて光を見出すことが出来ました」と振り返る。キルボルンの教えに車田が共鳴した背景に、「機上論争」の持つ負の側面があったことは否めない。次の文章に、車田の正直な気持ちの吐露とともに、それが具体的に記されている。

「機械上論争喧嘩などしますときは如何ですその間の心持はどうでせう私も経験がありますがそれは真

に口や筆に盡せぬ又云ふべからざる不安心があります正直なはなし心の中では戦慄で居りました殊に喧嘩に負けた時などは泣顔に蜂でもう同輩もまた主事もよい顔を仕て呉れず對手者はますますぞうてうして傲り散らしてもう手も足も付けられませぬ、よし勝ったにしても如何です決してよい心持のするものではありませんまい戦い最中も左様です胸がどきどきして堪ったものではありませんか、嗚呼君は却って憐れな人間です、もう良心が馬鹿になって来たのです早くサンド、ペーパーを用いませぬと君はとんでもない事になります」<sup>45</sup>

「真に口や筆に盡せぬ又云ふべからざる不安心」「正直なはなし心の中では戦慄で居りました」「勝ったにしても如何です決してよい心持のするものではありませんまい」「戦い最中も左様です胸がどきどきして堪ったものではありませんか」という、車田をついには脳溢血に追いやった「機上論争」中の彼の心の動きが素直に記されている。そして車田は依然として「機上論争」を続ける同僚を、「良心が馬鹿になって来たのです」「早くサンド、ペーパーを用いませぬと君はとんでもない事になります」と心配する。車田は他の箇所でも、「君は屢々喧嘩したり又乱暴するがそれでも罪人ではない積りですか…謙て神に罪を悔改め主キリストを信じなさい、然すれば君の心は真の平安を得ます」と強い調子で記している<sup>46</sup>。

また次の例に見られるように、車田以外の論者も、「機上論争」は神に対する罪であり、しかも重要な通信を滞らせるものであると問題視している。

「◎線上は風呂場の如し。凡ての人皆赤裸となる。真面目らしきもの必ずしも線上に於いては然らず。猫かぶれる者は線上にては化けの皮を現す也」

「◎通信界の敵は山にあらず。河にあらず。又暴風雨にもあらず。唯夫れ通信機械上の喧嘩也。喧嘩の原因に双方に愛を缺けるが故也。聖書は教へて曰く『愛は寛容とをなし又人の益を圖る也愛は妬まず誇らず驕傲せず非禮を行わず己の利を求めず軽々しく怒らず人の悪を念はず』と」<sup>47</sup>

「線上は風呂場の如し」とは電信をやり取りする電線上で、人は「化けの皮を現す」。これはつまり、モールス通信で相手を罵倒しあう「通信機械上の喧嘩」を指している。そして「通信界の敵」は山、河、暴風雨ではなく、この「通信機械上の喧嘩」であるという。喧嘩により通信は阻害される。その原因は電信技手の双方に愛がないことである。「機上論争」は、クリスチャン電信技手にとって、聖書が愛や寛容の対極として位置づける「妬み」「誇り」「驕傲」「己の利を求」「軽々しく怒」という数々の罪の集大成であったのである。

「◎通信の速達を計るに良き方法あり。掛員に聖書を読みむる事之れ也。電信局を新設しても、掛員を増加しても一向に墓々しく行かざる難問題も直に解決するを得べし。当局者の一考に値せずや」

「◎神の為に働く人は、月給の為に働かず。地位の為に働かず。勿論上官の為に働かず。之れ彼の陰、陽なく働く所以也。聖書に神は在さざる所なしとあり。基督者は常に神と共に在る也」<sup>48</sup>

通信の速度を上げるには、電信局を新設しても、電信技手を増やしても無駄であって、電信技

手に聖書を読ませれば「機上論争」もなくなり、根本的な問題が解決され通信が滞ることがなくなるという。柳澤生はその理由として、「神の為に働く人は、月給の為に働かず。地位の為に働かず。勿論上官の為に働かず」という点を挙げる。神に仕えるものは、公共の通信のためにこそ働く者であって、月給や地位、上司の存在は二義的なのであった。

実は明治12年11月19日には既に「近來電報ノ送受甚敷遅延ニ及ヒ…其原因ハ全ク…機械上種々ノ争論ヲ起シ、或ハ戯言等無理事ニ機械ヲ使用候ニヨリ…」という通達が出ている。これは通信中の機上論争による電報の遅延や、事故を起さないよう指示したものである<sup>49</sup>。とはいえその後も「機上論争」は一向におさまることはなかった。そこで大正時代になると電信技手の「品性」を問う見方が現れ、1922年には本省の呼びかけで「機上論争防止会」が全国規模で結成され、会員は銀製の鳩バッジを胸に着けた<sup>50</sup>。これは、このバッジを着けた人物は、「機上論争」をもうしないと固く誓ったことを意味している。「鳩」は平和のシンボルである。喧嘩をせずに、平和裏に通信が進むことへの希望が託されていた。

池上氏は車田らによる通信部内の電信員伝道を当局が黙認していた理由を、「職場の風紀の乱れや、効率の低下に苦慮」していた当局が、あえて干渉はしなかったと分析している<sup>51</sup>。確かに、効率性の重視によって「機上論争」を敵視する当局と、他者に対する愛に欠けた行為として「機上論争」を罪とみなす車田らクリスチャン電信技手の認識は、本質的な部分で相いれなかったとはいえ、表面的には重なり合っていた。だからこそ当局は、従業員の規律化を目的とする「精神修養」の一環として、電信員伝道を活用しようとしていたのかもしれない。

### 3. まとめ

本稿では、明治末から大正期にかけて最初期の職域伝道の一つであった電信員伝道に光を当てた。まずは、近代的な電信技術の担い手がキリスト教に接点を持つようになった経緯とその展開について明らかにするために、初期の電信員伝道について検討した。その際、伝道活動の一環として発刊された『天よりの電報』『電使』という二種類の教会機関紙に掲載された記事の中から、特に職場や仕事の様子を伝える比喩表現に注目し、分析した。

そこで注目できる点は、電信技手が神の電報を受信し、その他の人々に送信するという、電信技手という近代的な電信技術の担い手ゆえの明確な使命感である。しかしもちろん、信仰は使命感のみからは生まれず、日々対峙する問題の解決を求めてという場合も少なくはないだろう。そこで、電信技手がなぜキリスト教に惹かれるようになったかという理由を、職業や職場に内在する問題との関連でも考察した。その結果、官吏という立場に内在する問題、酒・煙草・遊興、通信中の喧嘩という三つの事柄に関して生まれる罪の意識から、信仰の道に入って行った電信技手が多いことが分かった。これらの問題はまさに、電信技手の職場文化を形成する重要な要素でもあった。とりわけ通信中の喧嘩、すなわち「機上論争」が、他者に対する愛に欠けた行為として罪とみなされていた。こうした見方は、筆者がこれまで検討してきた「正典」の中には見出せなかった。相対化という意味で、貴重な証言として位置付けることができるだろう。

最後に以上の知見から、モールス電信機というそもそもは外来の技術であったものが、明治以降の日本、特に電報を送受信する現場で、どのように受容されていたのかという問題について考察したい。ここで今一度、「機上論争」に立ち戻ってみたい。車田らクリスチャン電信技手から罪悪視され、確かに労災を引き起こしかねない職場慣行であった「機上論争」であるが、そもそもなぜこのような慣行が生まれたのかと問う必要があるだろう。「機上論争」を機能的に捉えれば、それは未熟者を有技者が鍛える「シゴキの文化」と考えることができる。有技者は己の「技能」の高さに優越感を味わえるだろうが、未熟者にとってそれはイジメに他ならない。しかしもしこの慣行に負の側面のみしか存在しなかったのならば、日本でも電信機の自動化が進む 1950 年代に至るまで、当局の意向に抵抗して「機上論争」が残り続けることができた理由を、上手く説明することができないだろう。

最後に、明治 39 年生れの泉節太郎の事例を挙げてみよう。泉は 23 歳の時に広島郵便局の電信課に配属され、約 6 ヶ月の勤務後に蓄膿症を患った。当時の鼻の手術は脳にこたえ、このため手術後に騒音の酷い電信機械室で働くのは辛く、強い疲労を感じたという。ところが、優秀であった泉は広島通信講習所の教官を命じられる。その泉は、電信技手の自分の「仕事に対する自信」は相手とのトラブルを頻発させたが、これは「誰からも掣肘を受けることなく、自分一人の責任において自由に仕事できた」ことも意味していたと記している<sup>52</sup>。「自分自身の自由意志で創意を働かせて努力をし、自分自身が仕事をしてゐるのだといふ意識を伴ふ場合は仕事は面白く出来」という「職人氣質」の本質をここに見出せる<sup>53</sup>。つまり、「機上論争」とは誰からも命令されず、自分の裁量で仕事をする「職人氣質」と不可分でもあった。

以上をまとめると、外来の通信機器とモールス符号の扱いをゼロから習得しなければならず、加えて数の多い電報をコストの制約から限られた人員で、しかも手動のモールス電信で正確に迅速にさばくことを強いられた、近代日本の電信技手の職場で生まれた文化が「機上論争」であったといえる。この職場文化は、電信技手たちが厳しい条件を受け入れる対価として、当局から自立して仕事をする有技者であるという自尊心を満足させたのである。

## 注

1 「第 145 回国会 通信委員会第 9 号」

([http://www.shugiin.go.jp/itdb\\_kaigiroku.nsf/html/kaigiroku/001214519990512009.htm](http://www.shugiin.go.jp/itdb_kaigiroku.nsf/html/kaigiroku/001214519990512009.htm))

2 猿賀俊文編, 1957, 『郵政辞典』 逋友協会版。

3 その名称は通信技手、電信員、電信オペレーターなど多岐にわたるが、ここでは初期の名称を使用する。

4 拙稿「通信労働のジェンダー化における組織文化の役割：「モールス文化」の生成と衰退」『年報社会学論集』(19号・2006年), 83-94。

5 総務庁統計局, 2005, 『平成 17 年度国勢調査: 抽出速報集計』

(<http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2005/sokuhou/zuhyou/b009-1.xls>) .

6 池上良正「近代日本のキリスト教における電信員伝道」『宗教と社会』(7) [2001], 3-21; 同, 2006, 『近代

- 
- 日本の民衆キリスト教：初期ホーリネスの宗教学的的研究』東北大学出版会。
- 7 池上, 2006 : 8-19.
  - 8 「電信技手の実験談」『天よりの電報』（第 81 号・明治 37 年 1 月 11 日）, 8-10.
  - 9 東京 NA 生「電信室の回顧」『電使』（第 5 巻・6 号・明治 45 年 6 月 25 日）, 11.
  - 10 『通信協会雑誌』（昭和 33 年 9 月 No. 568）, 57-59.
  - 11 車田秋次, 1974, 『御霊の法則：わが生涯の回想』車田先生米寿記念出版委員会, 30-33.
  - 12 車田, 1974, 42.
  - 13 野邊地三右衛門「電気存在と神の存在」『天よりの電報』（第 87 号・明治 37 年 4 月 10 日）
  - 14 「如何に接続すべき乎」『天よりの電報』（第 18 号・明治 37 年 1 月 11 日）
  - 15 車田秋次「人間の発信と神の受信」『天よりの電報』（第 96 号・明治 37 年 8 月 25 日）, 9.
  - 16 車田, 1974, 42.
  - 17 『天よりの電報』（第 1 号・明治 35 年）, 3.
  - 18 菊池生「通信器の職責」『天よりの電報』（第 97 号・明治 37 年 9 月 10 日）, 10.
  - 19 菊池純四郎「断線」『天よりの電報』（第 93 号・明治 37 年 7 月 10 日）, 9.
  - 20 車田秋次「送信」『天よりの電報』（第 94 号・明治 37 年 7 月 25 日）, 10.
  - 21 東京局 木村生「線路の障害＝告白」『電使』（第 5 巻・6 号・明治 45 年 6 月 25 日）, 17.
  - 22 「心霊界の無線電信手」『電使』（第 7 巻・12 号・大正 2 年 12 月 25 日）, 7.
  - 23 在青森 吉崎「所感」『天よりの電報』（第 2 号・明治 35 年）, 4.
  - 24 池上, 2006, 130.
  - 25 『読売新聞』（明治 10 年 3 月 19 日）
  - 26 『通信協会雑誌』（昭和 33 年 2 月 No. 561）, 34-35.; 『通信協会雑誌』（昭和 33 年 9 月 No. 568）, 57-59.
  - 27 車田秋次, 1974, 30-32.
  - 28 山崎亭治「救われ潔められたる証明」『天よりの電報』（第 86 号・明治 37 年 3 月 25 日）, 9.
  - 29 樋口為之助「主にある僕の証」『天よりの電報』（第 11 号・明治 35 年）, 11 - 12.
  - 30 山崎亭治「救われ潔められたる証明」『天よりの電報』（第 86 号・明治 37 年 3 月 25 日）, 9.
  - 31 孤島生「唯一部の電使！」『電使』（第 5 巻・5 号・明治 45 年 5 月 25 日）, 11.
  - 32 車田生「信仰の装甲」『天よりの電報』（第 110 号・明治 39 年 3 月 25 日）, 11.
  - 33 山中豊吉 編, 1944, 『通信協会 50 年史』無線同窓会, 30.
  - 34 渡辺音二郎, 1957, 『通信時代に生きる』通信時代社, 88.
  - 35 樋口為之助「主にある僕の証」『天よりの電報』（第 11 号・明治 35 年）, 11 - 12.
  - 36 新開光蔵「三千年の長き夢」『天よりの電報』（第 92 号・明治 37 年 6 月 25 日）, 10-11.
  - 37 雨森氏正「電気は比喩（承前）」『天よりの電報』（第 7 号・明治 35 年）, 10.
  - 38 池上, 2006, 137.
  - 39 車田秋次, 1974, 『御霊の法則：わが生涯の回想』車田先生米寿記念出版委員会, 32-33.
  - 40 拙稿「通信労働のジェンダー化における組織文化の役割：「モールス文化」の生成と衰退」『年報社会学論集』（19 号・2006 年）, 83-94.
  - 41 B 氏, 2003, 回想録『ある通信兵のはなし』, 25. B 氏は 1928 年に和歌山に生まれ、無線電信講習所を卒業後、戦時中は通信兵、戦後は関西の通信・電話局で係長・教官・次長を務めた。
  - 42 通信省官房保健課, 1927, 『英国における電信癱瘓症の伝播とその原因及それが予防に関する委員会の報

---

告』通信省官房保健課.

- 43 「対談 中電のすべて」、東京中央電報局 編, 1961, 『90年：東京中電のかお』社団法人電気通信協会所.
- 44 車田秋次「私の証」『天よりの電報』(第83号・明治37年2月10日)
- 45 車田秋次「勝利」『天よりの電報』(第97号・明治37年9月10日), 11.
- 46 車田秋次「クリスチャン」『天よりの電報』(第100号・明治37年10月25日), 11.
- 47 雑感片々 柳澤生『天よりの電報』(第99号・明治37年10月10日), 11.
- 48 前掲注47を参照のこと。
- 49 「電信百年こぼれ話(17)」、『東京中電』(昭和44年12月10日)
- 50 横浜電報局 編, 1970, 『横浜の電信100年』, 70.
- 51 池上, 2006, 135.
- 52 泉節太郎, 1984, 『電信電話と共に』古川書房, 30.
- 53 東京中央電信局同心会, 1924, 『黎明の電信』通信文庫, 82.

